

## 1. 消化管

40歳の男性。主訴は腹痛と血便。

現病歴：2カ月前から腹痛と下痢が出現、1週間前から血便を認めたため来院した。

現症：身長 172 cm，体重, 60 kg 体温 37.4 °C，血圧 124/82 mmHg，脈拍 72 /分  
眼球結膜軽度貧血あり。腹部 平坦、軟、軽度圧痛を認める。

血液所見：赤血球 308 万, Hb 9.5 g/dL, Ht 30.6% 白血球 9680 / $\mu$ L, 血小板 55 万

生化学所見：総蛋白 5.5 g/dL, アルブミン 2.7 g/dL, CK 7 U/L, AST 10 U/L, ALT 8 U/L,

LD 172 U/L

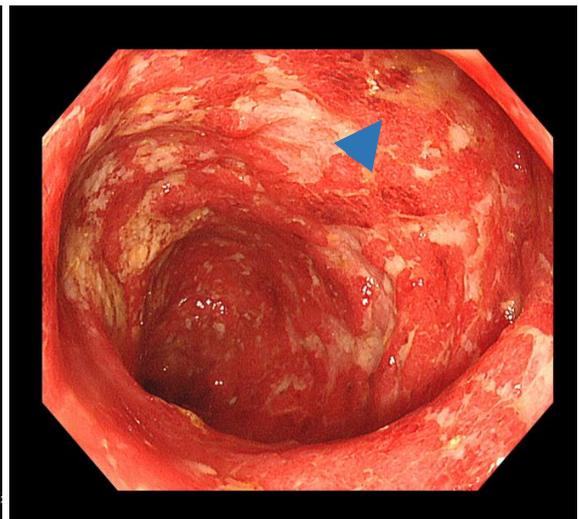
腹部造影 CT 画像(A) 下部消化管内視鏡像(B)を次に示す。(青矢頭より生検施行)

生検病理所見：粘膜固有層に好中球浸潤、陰窩炎、陰窩膿瘍を認める。

5ASA 製剤(サラゾスルファピリジン)とステロイドで治療を開始した。



(A)



(B)

(1) この疾患について正しいものを2つ選べ。

- a 消化管壁は全層性に障害される。
- b 直腸から始まり、連続性に広がる。
- c 内視鏡検査で縦走潰瘍や敷石像を認める。
- d 回盲部を中心に輪状狭窄がみられる。
- e 大腸がんのリスクとなる。

(2) 5ASA 製剤とステロイドで寛解導入後、5ASA 製剤のみで治療を継続していた。

2年後、腹部症状の増悪を認めたためステロイドを再び追加したが、症状の増悪と寛解を繰り返し、ステロイド抵抗性と診断された。

次に行う対応として正しいものはどれか3つ選べ。

- a ステロイドを直ちに中止する。
- b サイトメガロウイルスの検索を行う。
- c ピロリ菌の除菌を行う。
- d 免疫抑制薬を追加する。
- e 抗 TNF- $\alpha$  抗体製剤を追加する。

答え (潰瘍性大腸炎)

(1) b,e (2)b,d,e

## 2.肝

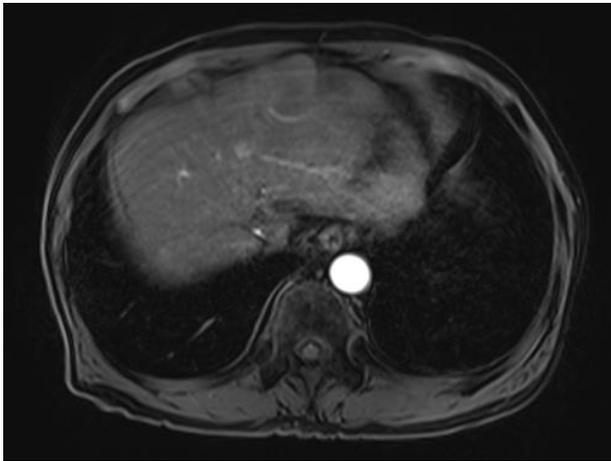
82 歳男性。半年前に肝細胞癌に対する肝動脈化学塞栓療法を施行された。術後経過観察の CT で治療部に異常を指摘された。

意識は清明。身長 158 cm 体重 52 kg 腹部は平坦、軟。

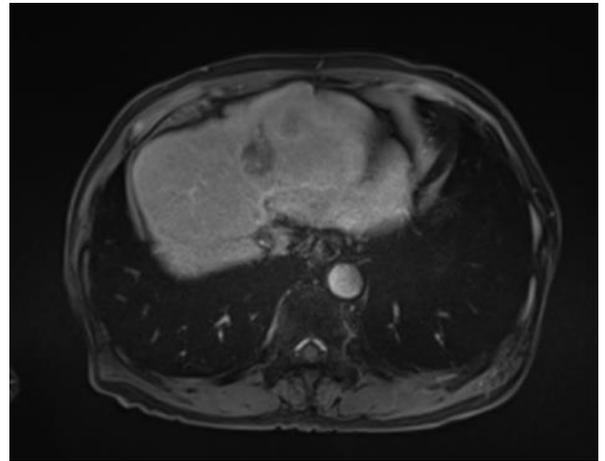
血液検査：赤血球 361 万，白血球 4020 / $\mu$ L，血小板 10.2 万，PT% 95% (正常 80-120)

血液生化学所見：総蛋白 7.4 mg/dl，アルブミン 4.1 mg/dl，AST 42 IU/L，ALT 29 IU/L，ALP 236 IU/L， $\gamma$ -GTP 709 IU/L，総ビリルビン 1.6 mg/dl，直接ビリルビン 0.3 mg/dl，ChE 170 IU/L (基準 400-800)，AFP 5 ng/mL

ICG 試験 35 % (基準 10 以下) 腹部ダイナミック MRI を以下に示す。



(動脈相)



(門脈相)

(1)最も適切な治療を 2 つ選べ。

- a 肝左葉切除術
- b 化学療法
- c インターフェロン療法
- d ラジオ波焼灼療法
- e 肝動脈化学塞栓療法

(2) 肝動脈化学塞栓療法について正しいものを2つ選べ。

- a 多発する肝細胞癌にも適応がある。
- b 肝予備能に影響しない。
- c 門脈閉塞がある場合適応となる。
- d ラジオ波焼灼と併用しない。
- e 術後の腎障害を起こすことがある。

答 (肝細胞癌)

(1) d,e (2)a,e